

徳島大学渭水会々報

第39号

発行/徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部内

表紙のこぼし…… 2
ユーカリの木

ご挨拶…… 3
渭水会会長 佐藤 勉

総合科学部では今(21)…… 4
国立韓国海洋大学校との船上シンポジウム
大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
総合科学部教授・副学部長 中川 秀幸

特集 水と光、アートとの出会い…… 5

徳島 LED アートフェスティバルの参加
について…… 6
大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
総合科学部教授 平木 美鶴

感動が人間を育てる…… 9
黒澤映画『椿三十郎』と少年時代の私
大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
総合科学部教授・学部長 石川 榮作

総合科学部で学ぶ「学科とコース」……10

スタートライン……12

新たなスタートつながりと共にー 橋本あゆみ

Let's sports Vol.1 ……16
「身体教養」を育み、動ける身体を獲得する
鹿屋体育大学学長 福永 哲夫

エッセイ……17
徳島の生んだ将棋名人 小泉 周臣
草創期の恩師を偲んで 山田 秀雄

関東びざん会……19

助成事業……20
平成21年度
・渭水会幼稚園部会報告 清水 扶美
・過去を語り、古郷を話し、地域の文化
に触れる夢多き徳友会 片山 武

私の初心俳句(研修資料) 岡田 忠

平成22年度
・渭水会幼稚園部会研修報告 森口 照代
・高校・特別支援学校部会総会並びに
講演会 毛利 久康

徳大ニュース……32
総科ニュース……33

編集後記……35



表紙のことば

ユーカリの木

写真は、城東高等学校（もと徳島県立高等女学校と徳島県女子師範学校が併置されていた敷地）にある雌のユーカリの木である。同じように城南高等学校（もと徳島県立徳島中学校）と本学総合科学部（もと徳島県師範学校）の敷地にも残っている。3本のユーカリの空に向かって伸びる姿に、そこで学ぶ若者の成長する姿が重なってくる。



渭水会会長
佐藤 勉

ご挨拶

平成22年度の徳島大学「渭水会」の総会で選出されまして、会長の重責にあたることになりました佐藤でございます。どうかよろしくお願ひいたします。

「渭水会」はご承知のように、学制が施行された2年後の、明治7年（1874年）師範期成学校として開設されて以来、130年に余る長い歴史を誇る同窓会であります。丁度この年は、「福沢諭吉」の「学問のすすめ」の第5編が世に出されたり、「森有礼」により、日本最初の洋式商科専門教育を行うための商法講習所が設立された年でもあります。すなわち、日本の近代教育がまさに始まろうとしていた時でもあります。

奇しくも同じような時期にスタートした、伝統のある「渭水会」の会長をお引き受けすることは、月並みな言葉であります。身の引き締まる思いであります。私のような浅学非才のものが、このような重責が務まるのか不安な気持ちでいっぱいですが、幸いなことに、素晴らしい副会長様をはじめ強力な役員の皆様がおいでますので、お力添えをいただきながら、私なりに精一杯の努力をしていく覚悟であります。

さて、私の大学時代を振り返ってみますと、徳島大学の学芸学部を受験し、入学した昭和41年は教養部の分離によりまして、教育学部に学部名が変更されていきました。当時はまだ木造校舎が立ち並んでおり、今から思えば外からの景観、内部の様相とも何とも言い難い古さの「渭水寮」にも若気の至りでよく酒を飲んで泊めていただきました。

在学中には鉄筋の学舎が完成し、引っ越し作業が大変であったことが懐かしく思い出されます。また、大学紛争の真ただ中で、教養部等の建物が一部の学生達により封鎖され授業が受けられないというような状態が毎日のように続きました。

その後20年が経過し、昭和61年には総合科学部となり、その卒業生もすでに5000名を超え、大学院が設置されるまでに発展しています。誠に喜ばしい限りであります。

大学でお世話になって以来、40年間何の恩返しも感謝の気持ちも表すこともなく、無為な年月を過ごしてまいりました。しかしながら、私の教員生活の中での唯一の大学との関わりは、昭和58年から9年間、大学の附属中学校で勤務させていただいたことです。そして、昭和61年教育学部から総合科学部に移行するのに伴ない、4附属は鳴門教育大学学校教育学部へ移管されたのであります。

これまでのご無沙汰に対して心よりの反省も込めて、これからは、しっかりと職責を果たしてまいりたいと考えています。

幸いにして、田中繁夫元会長・井内孝幸前会長さんが営々と築かれてまいりました素晴らしい数々の業績がございます。このような成果をしっかりと継承しながら、より「渭水会」が充実発展するよう微力ながら誠心誠意尽くしてまいりたいと考えておりますので、会員の皆様方のご支援ご協力を心よりお願ひいたします。

最後になりましたが、お忙しい中、長期間にわたり、「徳島大学渭水会」のためにご尽力いただいた井内先生をはじめ、榊田、露口両先生、役員の方々に心より御礼を申し上げ就任のご挨拶といたします。

（昭和45年中学校課程技術科教室卒）

国立韓国海洋大学校との船上シンポジウム

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

総合科学部教授・副学部長 中川 秀 幸



2010年5月19日、午後2時。村上理一教授（工学部コーディネーター）らが出迎えるなか、国立韓国海洋大学校の練習船ハンバダ号（6,686トン）は小松島港1万トン岸壁に入港しました。ハンバダ号は全長117mで横巾18m、ビルに例えると6、7階建ての高さとなり、東アジア諸国においては最大の練習船です（写真1）。

本年11月には海洋大学校として創立65周年を迎える、韓国屈指の国立大学の一つである韓国海洋大学校は、釜山広域市の海沿いにある小高い山のふもとにあり、ここに学ぶ学生は約1万人です。海事学部や工学部などの4学部と、国家的な3大学院を擁し、世界87大学と学术交流を結んでいます。徳島大学と韓国海洋大学校との学术交流協定は、2001年5月に工学部と総合科学部との2学部の交流締結によりスタートし、昨年4月7日には、水産大臣でもあった海洋大学校総長の呉巨敦（オ・コドン）先生一行が来学し、学术交流協定の5年更新の調印式を行いました。その折に呉総長は、「総長就任1年目の新米ですので、学生ならびに教職員の意見を真剣に聞きながら21世紀の海洋新時代の大学校として、世界に雄飛する人材群を交流校の徳島大学とともに育成して行きたい」と、真摯に語っておられました。

今回の寄港は、第1回船上シンポジウムから9年

ぶりです。ハンバダ号の乗員は教職員50名、海事实習生（3年生）104名。船上シンポジウムは、ニュージーランドや中国などの交流協定校からの研究者も参加し、20日と21日の両日にわたり、「ヒトと地球の健康」が主なテーマでした（写真2）。また常三島キャンパスでは球技などのスポーツ交流会も開催されました。船上シンポジウムは学部学生、博士前期・後期学生と若手教員の約100名が参加し、口頭発表（40題）とポスター展示（50題）では英語での若手教員と学生間で活発な質疑応答がありました。総合科学部からは、学生と教職員の20名が参加し、健康管理や韓国の方言などについての口頭発表やポスター展示を行いました。ちなみに、船内での食事は各種のキムチや豊富な海産物などでラーメンもあり、夕食には人気のマッコリも出てきました。今回の企画は、呉巨敦（オ・コドン）総長と本学の香川征（すすむ）学長との信頼と友情のもと、人材育成の一環として学生中心の教育研究セミナーでありました。

「海は、臆病な人間には、前進を阻む壁となる。しかし、勇敢に挑み続ける青年には、必ず、世界への道を開いてくれる。」との先哲の言葉のように、練習船ハンバダ号は5月22日16時、岡崎房述（ふさのぶ）国際課長らの見送るなか、小松島港から上海、マニラ、ジャカルタへの約40日間の航海に出航しました。



写真1. 練習船ハンバダ号（6,686 t）



写真2. 甲板での記念撮影（2010.5.21）



特集 **水と光、アートの出会い**
 —— 徳島 LED フェスティバル

市内を大小いくつもの川が流れる水都・徳島市。そのシンボルである新町川水際公園を中心に、4月17日～25日、LED（発光ダイオード）を使った水と光の祭典「徳島 LED アートフェスティバル2010」が開催されました。新町川、助任川の河岸には、逢坂卓郎氏をはじめ著名なアーティストの作品や、県内外からの公募作品が展示され、ボートクルーズなどでひょうたん島を巡るとすべての作品を鑑賞できるという仕掛け。徳島大学総合科学部からも3つの作品を制作・出品（→P6参照）し、光によるまちづくりという新しい試みに一役買いました。

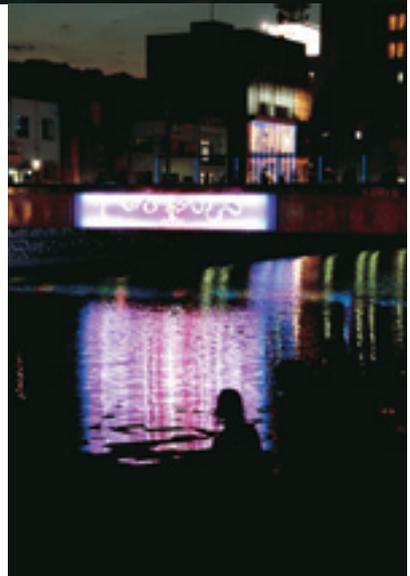


期間中は、連夜のように光をテーマにした音楽会やイベントが行われ、県内外から20万人を超える人々が訪れるにぎわいとなりました。反響の大きさに、実行委員会は来

←新町川にかかる銀河。ふれあい橋に埋め込まれた約2千個のLEDが1670万色にも変化します。

↑両国橋には日本のライトアートの草分け・逢坂卓郎さんが制作した「SORAとMIZU」が輝く。橋桁の下部にもLEDがまたたき、水面に幻想的な光を落とします

→ふれあい橋には、徳島市出身のたほりつこさんの「虹のラクーン」が。"ラクーン"はタヌキのこと。でも、どこにもタヌキはいません。「うまく化かされてください」とのこと



春以降の継続開催を決定（第2回は2013年。来年は期間限定のプレイベント）しました。

フェスティバル終了後も、両国橋、ふれあい橋にはアートが設置され、徳島の夜を華やかに彩っています。また、ふれあい橋の橋桁には星座をかたどったLEDが埋め込まれており、季節や時間によって異なる点灯パターンで人々の目を楽しませています。

秋の夜長、光と水の織りなすアートを眺めながら、河岸を散歩してみませんか？

かちどき橋から佐古大橋の約1.8kmは「ひかりプロムナード」。虫の声、魚のはねる音、水が青石の護岸をなでる音など、昼間は気付かない自然のBGMも、この季節ならではの。

徳島LEDアートフェス

徳島LEDアートフェスティバルの参加は、大学院の通年授業「プロジェクト研究Ⅰ」を履修している大学院生9名で徳島LEDアートフェスティバル学生部門公募に応募したのが切っ掛けである。この授業は、地域活性化を目標に総合的知を集め学生が主体となり地域活性化を実践的に具現化する事や学生グループ毎に発案、計画、実施、成果発表を行い、自治的能力や実践的能力を養う場とする事を目的にしている。

学生の専門は科学、物理、生物、情報、言語等の学生でアート系の学生はいなかったのであるが、地域活性化事業、LED講習会の開催、iPhoneアプリケーション講習会、学生部門公募作品案を作り応募等の流れで前期授業の活動をした。結果、大学院

から1点の作品が入選した。大学院の授業に特別参加していた総合科学部学生の応募からは2点が入選したので、計3点の入選となった。後期の授業では、入選した「ゆびさされたい」「Whirlpools (渦)」「The Hidden Tune」の3作品の制作活動をした。

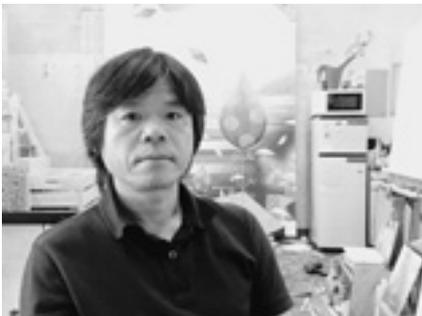
この3点の作品制作班とHPを作る広報班の4グループに院生8名を割り振り、活動の中心となってもらい、学部1年生の授業「アート創生プロジェクト」の45名も加わって制作と広報活動を開始した。

「プロジェクト研究Ⅰ」の院生が学部生に制作の過程や計画を理解してもらいグループで制作を進めていくためには、院生の綿密な計画、準備と指導力が必要となってくる。

以下は、その作品解説と広報についての報告である。

広報班

メンバー 徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻 孫立民、胡露曦、ホウウガク・総合科学部「アート創生プロジェクト」受講生6名
活動内容 情報を発信するためのWebサイト (<http://www.ncc-1701.jp/led/>) を立ち上げ、アートフェスティバル出展3作品のブログページを開設した。ブログページでは、それぞれの作品制作チームの活動取材し、制作の進捗状況などを報告している。



平木 美鶴

徳島県徳島市南常三島町 1-1
徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部所属
総合科学部 併任
絵画表現研究室 (マルチメディア B 棟 1F)
直通 tel/fax 088-656-7167
hiraki@ias.tokushima-u.ac.jp

まとめ

アートフェスティバル期間中は、授業としてナイトガイド、作品鑑賞、イベント参加を課した。

ナイトガイドは、18:00~22:00まで観客への作品説明や会場誘導等に学生達が取り組んだ。期間中の観客数は20万人もあり、学生達は溢れる観客達を目の前にして初めてこんなに大きなイベントに参加しているのだという実感を持ったようである。また、ガイドとして観客と接する事で作品に対する愛着も増したようであった。

反省としては、設置日に雨が降ったために「ゆびさされたい」のQRコードの印字が流れてしまった。急遽作り直す事はできたが、「Whirlpools (渦)」は、電気配線に雨が入り込みプログラムが壊れてしまい正常な動きができなくなったのは残念であった。雨とは関係ないが「The Hidden Tune」は、室内実験では反応していた人の動きを感知するセンサーが、野外ではノイズが多くて正常な働きをしなかった事と公園の明かりが強すぎた事で光が分かりにくくなったという失敗があった。電気は雨に弱い事も含めて野外展示の難しさを実感した。

今回の取り組みは、反省も多かったが実践的授業を作る試みとしては座学では得難い多くの事を学ぶ機会になったと思う。

ティバルの参加について

大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部

総合科学部教授 平木美鶴



「ゆびさされたい」

「ゆびさされたい」

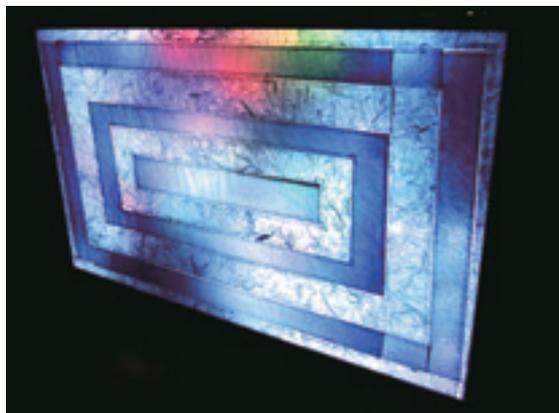
制作グループ 徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻 渡辺崇史、田野裕也・総合科学部「アート創生プロジェクト」受講生12名

作品解説 様々な人の人差し指をシリコンで型取りし、LEDを入れた樹脂にて指を複製したものを展示する。型取りする際に年齢や名前、趣味等その人のデータを聞き取りしそのデータをQRコードに登録して、その指にQRコードを付ける。展示された指は夜には光り、不思議な雰囲気を出すとと思う。携帯電話でQRコードを読み込む事でその指の人間を理解できる仕掛けとなっている。匿名性のある指に指をさされる展示であるがQRコードを読み込む事でその指の人間を理解した上でもう一度指をさされた時の心理状態の違いを表現したい。

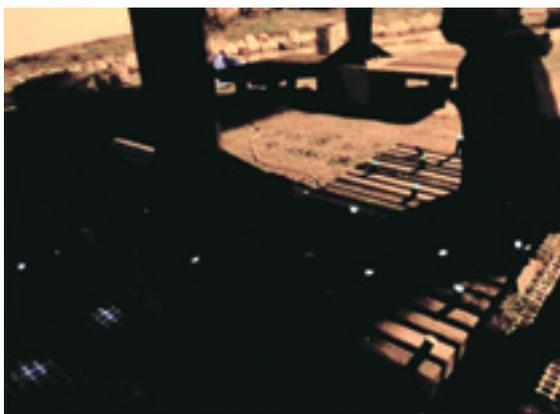
「Whirlpools (渦)」

制作グループ 徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻 二宮一毅、宮川尚之・総合科学部「アート創生プロジェクト」受講生12名

作品解説 徳島のLED、鳴門の渦潮、そして伝統工芸品である阿波和紙を融合して新たなアートを表現する。ボックスの表面に阿波和紙を貼付けたアクリル板を設置し、渦巻模様を制御させたLEDで光らせる。この作品でアートの素晴らしさや徳島の魅力を再確認してもらいたい。



「Whirlpools (渦)」



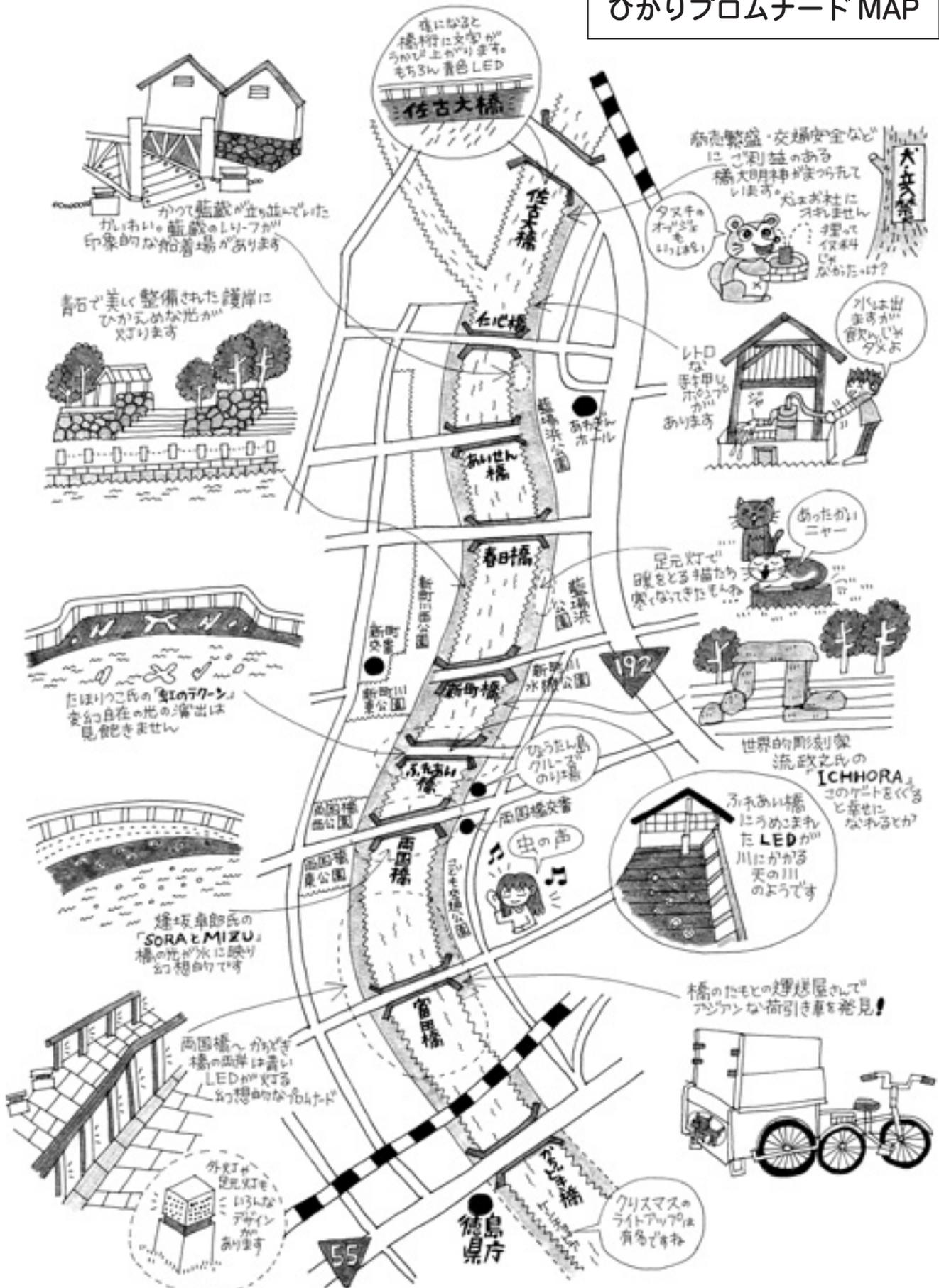
「The Hidden Tune」

「The Hidden Tune」

制作グループ 徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻 藤井健司、黒谷功・総合科学部「アート創生プロジェクト」受講生12名

作品解説 公園のベンチにセンサーを設置し、そこに座る人の挙動に合わせて、周囲の景観に合わせて配置したLEDが点灯する。「座る」という個人の行為と周りの「景色」という公共的な環境がリンクする楽しさの提供とコミュニケーションを含めた「場」をつくることを目的とする。

新町川河畔 ひかりプロムナードMAP



黒澤映画『椿三十郎』と 少年時代の私



学部長の似顔絵です。
社会創生学科 富士理左さん(1年)に描いてもらいました。

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

総合科学部教授・学部長 石川 榮 作

徳島大学に着任して32年目、最近「知識よりも感動」をモットーにして授業を進めています。もちろん知識も大切ですが、しかし、私の経験から言って、人間を作り上げるのは何よりも感動だと思うからです。本会報で連載コラムの機会を与えられましたので、これまでの私の生活の中で映画、恩師、文豪ゲーテ、寅さん、オペラ、人との出会いなどから受けた感動を数回にわたって綴っていきたいと思います。

大学の教壇に立つ現在の私にとって、まず取り上げねばならないのは時代劇映画です。映画は保育園に通う頃からの楽しみで、特に小中学校時代はかなりの映画を見てきました。その中でも特に感動したのは、黒澤明監督の映画『椿三十郎』（昭和38年東宝）です。この映画は小学校5年生のとき団体に映画館へ鑑賞に行きましたが、そのときのワクワクした気持ちは今でも忘れられません。三船敏郎が演じる椿三十郎の素早い剣さばきにも感動しましたが、悠然と構える城代夫人（入江たか子）が全身張り詰めた三十郎を諫めて、「あなたはギラギラし過ぎて

いますね。まるで抜き身の刃みたい。よく切れます。でも本当にいい刃は鞘に入っているものですよ」と言う言葉にも、幼い少年ながら、感動してしまいました。剛の中にも柔が必要です。厳しさの中にも優しさがが必要です。人生、力いっぱい励むのもいいけれど、ときには力を抜いてリラックスする「心のゆとり」を持つことも大切なことです。今の私のこのような人生観も、振り返ってみれば、この少年時代に観た映画に由来しているようです。とにかくこの映画の魅力は、随所に剛と柔、動と静がコントラストを成すように見事に描かれている点です。悪事を暴くために若侍たちが走り回るときの音楽も最高です。私のオペラ好きの原点もこのような時代劇映画にあるようです。映画から受けた感動がこれまで自分を育ててくれたような気がします。特に黒澤映画『椿三十郎』は50年近く経った今でも、ビデオ等で観るたびに、新しい感動を覚えます。名作は常に新たな感動を与えるものです。1000本の映画の中からベスト10を決めるのが、私の老後の楽しみですが、この映画は文句なしにベスト10に入ります。



総合科学部で学ぶ—[学科とコース]

広い視野に立って専門知識を深める

従来の学問の枠にとらわれることなく、さまざまな観点から自然現象や社会現象を分析し、現代の諸問題に有効な解決策を模索していきます。断片的な知識の寄せ集めでなく、関連分野の知識を結集し統合することが可能です。学部共通科目や総合科学テーマ科目で総合性の重要さを学び、2年次からは専門領域としてコースを選択しながら、専門的な分析手法を身につけていきます。広い視野を持ちつつ核となる専門性を深めることによって、実社会で活躍できる総合性と専門性を兼ね備えた人材の養成をめざしています。

人間文化学科

Department of Human Sciences

日本を含む様々な国々や地域の社会や文化、人間一人一人の心身の健康について関心をもつ人材、国語および外国語を深く理解した上で人間の心や文化を専門的に学び、関連分野へも視野を広げることのできる柔軟性と創造性に富む人材の養成をめざします。

社会創生学科

Department of Civil and Environmental Studies

現代社会が抱える様々な課題に関心を持ち、法律・経済、公共政策、地域、情報、環境、生命などに関する多様な学問の成果を専門的に学ぶとともに、それらを総合・融合させることによって、望ましい社会の創生に向けて貢献できる人材の養成をめざします。

総合理数学科

Department of Mathematical and Material Sciences

自然科学(数学・物理学・化学・地球科学)の基礎学力を身に付け、数理・物質科学の各分野を専門的に学び、その知識をもとに従来の枠組みにとらわれず、自然界における諸現象を総合的かつ論理的に分析できる人材の養成をめざします。

コースは、将来の“自分の夢”

2年次に進級する時にコースを選びます。

1年次で履修する学科共通科目で専門の基礎を学び、専門的な講義に触れ、理解を深めてから、進むコースを選択できます。

国際文化コース

Comparative Studies
in Society and Culture

世界の様々な地域に固有の、あるいは地域横断的な諸問題に関心を持ち、それらの問題に対する理解力、調査能力、さらに語学力、情報発進力を持ち、諸問題に対して様々な立場から対処できる人材を養成します。



心理・健康コース

Psychology and Health Studies

人間の健康的な生活や社会づくりに向けた諸問題を、心理学や生理学、また社会学といった側面から理解・評価・分析するために必要な能力を身につけ、とくに臨床心理学やスポーツ科学の見地から、人々の心と身体の健康生活を総合的に支援できる人材を養成します。



公共政策コース

Public Policy Studies

社会科学のうち、法律学、政治学、経済学、および経営学の基礎となる知識を習得した上で、現代の社会が抱える様々な問題に対して公共政策的見地から解決策を提示することによって、持続可能な社会を創生することに貢献できる人材を養成します。



地域創生コース

Communitical and Regional Studies

産業空洞化や経済的不均衡の拡大、少子高齢化やコミュニティ・地域文化の変質・情報通信技術社会のもつ問題など現代の地域社会が直面する多くの問題の解決に向け、的確な判断と柔軟な発想に基づき、情報を含めた文理融合型の「まちづくり・地域づくり」を、積極的に推進できる人材を養成します。



環境共生コース

Symbiotic Environmental Studies

生物学を中心に化学分野を含む科学的な専門素養の上に、地域と一次産業を支える環境・生物資源の保全と利用を通して、社会に貢献できる人材を養成します。そのために、生命科学や環境化学の教育に重心をおくと同時に、人間や社会と環境との関わりを理解する上で必要な人文科学・社会科学も学びます。



数理科学コース

Mathematics and Computer
Science Studies

数学をもっと学びたい人、コンピュータに興味のある人、ソフトウェアの開発がしたい人、「数学」や「情報」の教員を目指す人などに向いているコースです。数学・情報科学の研究を通じて、教員や公務員をはじめ、研究・開発・情報・金融など様々な業種・職種で活躍できる論理的思考能力と柔軟な発想を身につけます。



物質総合コース

Integrated Material Science Studies

化学、地球科学ならびに物理学などの基礎と物質科学関連領域の専門的素養を身につけます。新物質、新現象、新事実などを発見・追究し、環境問題や環境調和基盤技術などへの応用的アプローチを学び、社会に貢献できる人材を養成します。



スタートライン

S T A R T L I N E

新たなスタート 一つながりと共に

鹿児島大学大学院 臨床心理学研究科臨床心理学専攻 修士1年 橋本あゆみ

徳島大学を卒業して5ヶ月、今私は大学院生として新たなスタートを切り、新たな地、新たな生活環境の中で、新たな仲間と共に臨床心理士として社会に貢献するという目標に向かって日々奔走しています。大学院での濃く実践的な学びには戸惑い躓くことも多く、今まで以上に自分と向き合わざるを得ない状況に悩むことの連続で、そこから学び、得られるものの大きさを感じています。振り返ってみると、この5ヶ月間は環境の変化に慣れることで精一杯だったように思います。自分から望んで飛び込んだ世界ではありましたが、周囲の変化に戸惑い、足踏みをし、先へ進むのが怖くなってしまふこともしばしばでした。その度に、徳島大学で共に学び、共に笑いあった仲間たちに励ましをもらっています。彼らも大学院生や新社会人として新たなスタートを切り、多忙な日々を送っているようです。学部時代のように、その場で同じ体験を共有し分かち合うということはほぼできなくなりましたが、メールや電話でのやり取りからはそれぞれの地で一人ひとりがしっかりと前を向いて、自分なりに頑張っていることが伝わってきます。どれほど距離が離れていても、私にはこんなに素晴らしい仲間がいて、皆それぞれががんばっているのだということが心の支えとなり、躓きを乗り越え次に向かっていく勇気と力を与えてくれます。

5ヶ月間というスタートを切ってまだ間もないですが、その5ヶ月の間に得た気付きは臨床心理学のフィールドで歩き出し始めた私にとって、非常に重要なものだったように思います。それは物理的に身近な人とのやりとりの中で気付くことはもちろんありますが、今は遠く離れてしまっている人たちと

の関係から気付くこともまた多く、それらには背筋を正されるような思いです。そして自分の弱さや欠点と感ずるところをその気付きにより補完していく、また、その気付きをもって改善していくという作業を繰り返し、自分の中の世界がより多面性を持つものに変化し続けていることを感じています。自分の弱点と正面から向き合い続けることには大変なエネルギーが必要ですが、自己成長には欠かせない作業であり、今より上のステージに進むにつれ伴う責任を認識するためにも欠かせない作業でもあります。自分と向き合うことで得る変化やその過程は、これから先心理士として人々と向き合うときに、より深く相手のことを考えていく手がかりとなっていくように思います。離れてもなおそのような変化のきっかけを与えてくれる仲間たちに感謝しています。

徳島大学で仲間たちと過ごした日々や彼らとのつながりは、私の今この瞬間にとって未来に前進するための追い風となっています。これから先幾度も、自分の置かれている状況が辛くどうしようもないと思うときがあることと思います。しかしどんな困難も、この追い風とともに乗り越えていきたいと思えます。

(平成22年人間社会学科人間行動コース卒)



Let's sports

体や健康、スポーツに関する話題を
シリーズでお届けします

Vol. 1

「身体教養」を育み、動ける身体を獲得する

鹿屋体育大学学長 福永哲夫



健康で活発な日常生活を遂行する為には生活環境に適応できる身体能力が必要である（この能力を総称して「生活フィットネス」と呼ぶ事にする）。「生活フィットネス」は筋力、パワーやスタミナ等の身体機能と身体を構成する脂肪や筋肉により構成されている。



「生活フィットネス」は生活環境により著しく変化する。平均的な生活を送っている場合に比較して、日頃活発な身体活動（スポーツ）を実施している場合には「生活フィットネス」は高い水準を維持する事が出来る。一方、運動不足状態が続くと「生活フィットネス」が低下し、

また、病気などをきっかけにして急激な「生活フィットネス」の低下が観察される。

「生活フィットネス」の中でも特に重要な要素に脚の筋機能がある。筋機能は筋量により決まる。脚筋機能の低下は、「歩く」「階段を昇る」「立ったり座ったりする」といった日常生活動作の遂行に支障を来し、関節への負担を増し、ちょっとしたバランスの崩れを修正できず転倒の危険性を高める。加えて、身体不活動は骨量の低下をも引き起こすので、骨折しやすくなり、ひいては寝たきり状態をもたらすことにもなりかねない。

近年、大学に入学する若者の「生活フィットネス」が低下している傾向が見られる。ある調査によると10年前に比較して約10%の低下が見られる。つまり1年間に約1%の「生活フィットネス」の低下であ

る。その原因は主に若者の運動不足に由来する。

一方で、適切な身体運動は「生活フィットネス」を向上させる。ある総合大学のデータでは新入生の脚機能が夏休みまでの前期に約10%もの向上が見られた。これは高校生活の受験勉強などによる運動不足が大学における体育授業や様々な身体運動の参加により向上したことを示す例である。

「生活フィットネス」は毎日のように変化する。その変化は測定してみればよく理解できる。例えば、体重とウエストを毎日測ってみてほしい。その変化は毎日の生活習慣の結果である。運動しないで食べ過ぎる生活は確実に脂肪を増やし筋肉を減少させる。大学時代にしっかりと自らの身体情報を得る方法を身につけて、生活習慣をコントロールする技術を獲得してほしいと思う。

「身体教養」とは自らの身体を正確に把握し、理想とする身体を創造するための知識と技術を養うことであると定義する。日本国憲法で保障された「健康で文化的な生活」を確保するには「身体教養」は必要不可欠である。若者から高齢者まで、生きている人間として「身体教養」を身につけて、健康で文化的な生活をエンジョイしてもらいたいものである。

（昭和39年中学校課程
保健体育教室卒）



徳島の生んだ将棋名人

小泉 周臣

◆ 盤上の挑戦者たち

今年もまた将棋界の挑戦者たちによる攻防が激しい。それは女流王位戦にも及ぶ。平成22年6月17日、清水市代王位（41歳）に対し、甲斐知美（27歳）が挑戦し、徳島市内のホテルでの第4局（3勝1敗）で、新女流王位（第21期戦）を取った。若手の登場だ。

徳島のアマチュア将棋戦も盛んであり、小学生の男女から老人まで攻防戦を楽しんでいる。したがって、将棋は、広い意味では、日本文化（趣味）の1つであるといえようが、将棋は、どのくらい昔からあったのか。将棋の源流地は、いったい、どこなのか。

◆ 将棋の略史

将棋の源流はインド地方であろうといわれる。そのインドから中国または東南アジアを経て、日本へ輸入されたらしい将棋は、古くは、遣唐使たちなどが、その指し方技術とともに将棋盤等を持ち帰ったとも。それを日本人向きに、少しずつ改良してきたらしい。しかし、普及は貴族階級内に長くとどまったようだ。広く普及しはじめたのは下克上の時代に入ってから。特に、戦国時代に入って、信長・秀吉・家康ら戦国武将たちが好んで将棋を指したという。それは、点茶の作法・茶釜・茶碗等の収集、南蛮伝来の宗教（キリシタン）等へ興味を示したのと同じように、生活上の余裕が出てきて、それらが戦国時代の文化を形成しつつあったからであろうか。



美馬市脇町のうだつの町並みに残る小野五平の生家

徳川家康が将軍になった慶長8年（1603）以降も下剋上の風潮は続き、将棋は武士・公家・僧侶ばかりでなく町人の身分の男たちの間にも広がった。しかし、将棋の駒の名称が漢字表現だったので、女性たちには人気が湧かなかったとか。

ところで、徳川幕府は武断政治から文治政治への転換をはかる有力な方法としてか、茶道で茶頭の社会的地位を認めたように、将棋師という社会的地位も認めた。実力のある将棋師たち数名に、数十石程度の家禄を与え、生活を保障した。それは下級武士程度のものであったが、幕府公認の遊芸師の地位を得たものだった。慶長12年（1607）には、将棋師の本因坊算砂と大橋宗桂との対局があり、名人戦の原型が始まった。当時の名人位戦は世襲制で、将棋師の間のみで争われ、家元制だった。

第1世名人位は大橋宗桂が就位したのである。

◆ 徳島出身の将棋名人

明治維新以後、四民平等の世の中となり、将棋師を支えた幕府権力等の背景がなくなった。しかし、町人等の間にもひろがった将棋はなくなり、一部は賭将棋として非難されたりもしたが、明治時代以後も大衆の楽しみとして存在し続けた。そして、名人位戦は大橋家など特定の将棋師の家柄に限定されず、個人の実力本位の時代となり、制度上は家元制はなくなった。けれど、旧将棋師たちの実力はあなどり難く、明治初中期の第11世名人は伊藤宗印（旧家元の1人）が就任。名実共に実力本位といえるのは、第12世名人小野五平（徳島県出身）からであった。時に、明治31年（1888）、小野68歳の老齢だった。

小野は、後援者に推されて名人位（終身制）を名乗ったが、異議を唱える者もいた。

小野の幼名は喜太郎。郷土史本の「徳島先賢伝」によると、脇町（現美馬市脇町）の商人宿木五の息子で、天保2年（1831）生まれ。少年のころは、宿の泊まり客を相手に将棋を楽しんだ。やがて、当時の都・京都に出て、



小野五平氏
（「徳島先賢伝」より）

本格的に将棋の修業を始めた。プロの将棋の主流派は、すでに江戸グループにあったわけであるが、京都や大坂(阪)にも強豪がいたのである。後に、小野は江戸にも出て、幕府の将棋師たちとも勝負した。また、棋聖と称されていた天野宗歩の門弟となって修業。明治維新後は、守旧派の人々ばかりでなく、開明派の福澤諭吉らとも交流し、支援を得ていた。

名人位に就任したころのエピソードの1つとして、小野は榎本武揚と将棋を指したことがあったらしい。榎本は、元幕府海軍副総裁で函館五稜郭で官

軍に抵抗したことで有名。維新後は明治政府の海軍卿等を歴任した人物。

当初、榎本のほうは小野を知らず、がむしゃらに大胆に指したが、終了後、小野が名人位であることを紹介され、びっくり仰天の様子だったという。

小野名人は終生の一世代制だったため、約22年間も名人位を保持した。五平の墓は東京と協町の両方にある。

昭和28年中学校課程経済学教室卒
徳島文理大学

エッセイ

草創期の恩師を偲んで

山田 秀雄

私たち学芸学部第一回生は平成22年4月に傘寿記念の同窓会を持った。40名に近い学友がすでに他界され、一同は肅然として黙祷を捧げた。

会の終りに一宮俊一君は「当時の先生方は誠に多士済済、我々は真に幸福な生徒であった」と述べられ、思い出す御名前を挙げてその面影を偲んだ。歩くと床がぎしぎしと軋むような木造の旧兵舎の中で教師と学生が一体となって励んだその昔。創業も又守成と同様容易ならざるものがあったことにも思いを馳せて頂きたいと思う。

ここでは思い出すままに、やや恣意的ながら先生方とそれにまつわる話題を挙げさせて頂きたいと思う。

英語教室の蒲池正紀先生は県内切っぴの文化人であられたが、どんな生徒の疑問にも葉書やメモ書きで応えて下さるような律儀な方でもあった。歌人でもある先生の講義は難解ではあったが、その記述は華麗で奥深いものがあった。昭和26年郷里の大学へ移られる送別会の席上、教室の運営や学生の在り方について秋霜烈日の批判と教訓とを残されたのが強く印象に残っている。

植野豊治先生は京大で哲学から英文学へ転科されたユニークな方で、庄町の御自宅では土日の時には希望者のために講読会をされていた。勿論報酬などは全く無しの真剣なものであった。又教室の河野、山口両君らが中心となり、植野先生や米國帰りの村井道明先生、浅地昇先生、フィン先生にも相手になって頂いてESSを作った。他の学部からも集っ

て男女15人位だったと思う。書割り無しの英語劇やミュージカルまがいのものもやったし、クリスマスパーティなども貧しいながら徹夜で楽しんだ。

白石正雄先生の國語学では時折フランス語のニュアンスをはさんで下さるのも珍しく、後の橋本先生によるフランス語の課外学習へとつながって行く。

その経済の橋本純二先生は慶応の御出身で、講座派の内実にも詳しく、種々その秘話を語って下さった。又市場経済論で「ケインズ学派の口ぐせの"other things being equal"のようなずるい言い廻しにだまされちゃいかん」などと面白くおっしゃっていた。

我らが学部長鶴田常吉先生は、軌範文法や言語過程説とは趣きを異にする記述文法の雄としての、いわゆる「鶴田文法」に私たちはひそかな誇りを持っていた。

心理学教室が発刊した雑誌「グループダイナミクス」や富本健輔先生の「ドイツ中世史」など何れも学部が日本の学界において発信した偉大な功績であって長く記憶に留めておかなければならないと思う。

その心理学の小田信夫先生は心理学史と概論とを兼ねた形で講義を進められた。先生はレヴィンの形態学説に深く傾倒され、そのトポロジーに対応するホドロロジーの概念を導入したレヴィンの発想を更に発展させ、新しいパラダイムとしてのトポ・ホド心理学の構築を目指された。元来数学が御専門の先生は行動の関数を偏微分方程式で示された。しかし我々は只啞然として黒板を見つめる丈であった。何

を以て変数とされたかは今となっては知る由もないが再検証の意味はあろうと思う。

数学といえば田村孝行先生も本学の誇る天才であられたが、私の如き落ちこぼれ組にも常に温い対応をして下さった。後に1960年、カリフォルニア大学の教授として招聘され渡米された。

ややハイトーンで話される高坂正顕先生の集中講義「生の哲学」は難解ではあったが、自由で深遠な京大の正統派哲学を実感した。

教育学の栗津龍智先生は「量から質への転換」ということを常に言われた。橋本純二先生は「語学は7年間の努力があればものになる」とおっしゃっ

た。今風に言えば「継続は力なり」であろうか。すべての先生方がこのようにいつも未熟な我々を励まして下さった。

食料さえ十分ではなかったあの困難な時代に、先生方から賜った学恩や思い出の数々はとてもここで述べ切れるものではない。多くの友を失って、また越ゆべしとも思わざりし八十の坂を越えた今、まさに命なりけりの心境である。私たちは今後とも我が渭水会の行く末と発展とを心静かに見守って行きたいと願っている。

(昭和28年中学校課程音楽教室卒)

関東びざん会

2年に1回開催されている徳島大学同窓会連合会関東地区交流会（関東びざん会）の第2回交流会が平成22年10月2日（土）午後4時から「倶楽部 PASONA 一表参道」で開催されました。徳島大学から香川 征学長と3人の理事が出席され、7支部の役員と会員が合計で49人、そして事務局から3人が出席されました。

学長の挨拶の中で、改修された各学部の施設の紹介があり、発展しつつある徳島大学の姿を印象づけられました。続いて各同窓会の挨拶があり、渭水会からは都内世田谷在住の福家恭子様が挨拶されました。その後、理事の紹介があり、懇親会へと進みました。懇親会の中で総合科学部教授・宮澤一人先生が楽譜化された「徳島大学の歌」がパソナミュージックメイトにより演奏され、和やかな雰囲気の中、6時過ぎに閉会しました。

渭水会の参加者

竹原真寿子（昭和32年卒）、野田 章子（昭和32年卒）、福家 恭子（昭和32年卒）、濱田 治良（昭和46年卒）、福家 良枝（昭和63年卒）



渭水会幼稚園部会報告

清水 扶美

渭水会幼稚園部会が、平成21年10月24日（土）午後に鳴門教育大学附属幼稚園でありました。来年度、第41回中国・四国音楽教育研究大会が、徳島で開催されます。徳島市内の幼稚園で公開保育等があり、それに向けて全園で音楽教育について研究を進めているところなので、よい研修の機会となりました。鳴門教育大学芸術系コース(音楽)教授 頃安利秀先生を講師としてお迎えし、「からだと声」についてご講演いただくとともに実技講習もありました。

頃安利秀先生については、鳴門教育大学公開講座の「楽しい歌唱教室」を見て憧れておりました。先生がご指導された、附属幼稚園「みどり会」保護者のコーラスを聴かせてもらう機会には感動した経験もあって、楽しみにしておりました。須見会長さんの講師紹介の後、頃安先生から、恩師の野口三千三先生のことや、身体感覚についてのお話と模範実技を見せてくださいました。続いて私も先生のご指導のもとに動きをまねたり、自分の体をほぐしながら、柔らかい動きになるように努めました。お話の内容を一部紹介させていただきます。

○「頑張る」ことと「力を抜く」こと 頑なに頑張るのではなく、力を抜くことで、次に全力投球でできる。「次の瞬間新しく働くことのできる筋肉は、今休んでいる筋肉である。今休んでいる筋肉が多いほど、次の瞬間の可能性は豊かである。」このお話は、とても印象的でした。他の場面でも大事を控えた時等、物事にあたる時もこの考え方の大切さを感じました。

○柔らかさとは 「次の瞬間の変化の可能性の豊かさ自由さである。」体の柔らかさ、心の柔らかさ

それは、なんてすばらしいことでしょう。まるで私達が日々接している無限の可能性を秘めた幼児の心や体のようだと思います。私も少しでもそうありたいと思います。

お話を聞いたり、頃安先生のしなやかでとても柔らかく、自然な動きを目の当たりに見て、驚くと共にとても感動しました。実技をしながら、自分の体が十分動かないことに気付き、先生の動きとは全く違うことを感じながら、それでも少しでも近づきたいと一人一人が努力した貴重な経験でした。体を柔らかくして、不要な力を抜き、重力にまかせて自然体にしていくことで、先生のように体から声が美しく響くのだと気付かされました。

その後、先生のご指導で「もみじ」の曲を皆で声を合わせて歌いました。おかげで、久しぶりに生徒になって、音楽的な雰囲気の中で楽しく歌うことができました。終りには、先生のすばらしい、そして美しいテノールの歌を聴かせていただき、心から酔い豊かな気持ちに溢れ、幸せなひとときでした。「子ども達が、よい声を出すには」という質問には、先生から「小さい子ども程、動きながら歌ってみる、ダンスをしながら歌うこと」等を教えていただきました。最後にお礼のことばを森口照代先生が、私達の気持ちを十分に表現してお話くださいました。

これからもこの貴重なお話や実技の経験を毎日の子ども達との生活の中で、研究大会に向けての実践の中で、また実生活でも生かしていきたいと考えています。

(昭和48年幼稚園課程卒)



過去を語り、古郷を話し、地域の文化に触れる夢多き徳友会 片山 武

昭和25年に徳大に入学、近畿在住の同窓生により組織し、年に1度の集いをもち、過去に思いを巡らし、古郷を語り、現況を話し合う16名の会、名付けて徳友会という。

会として存在するからには、簡単な会則を設け、1名の会長と2名の幹事を決め、会の運営は当番幹事2名により企画・運営全てを担当、幹事に当たる2名は、ローテーションを組み、全ての会員が幹事役を引き受ける仕組である。

現在、我々会員全て喜寿を終え、やがて80歳に手が届こうとしている。年に1度のこの会合は、まさに、自己の健康な姿と存在感を示す唯一絶好の機会ともなり、集まれば学生時代の話題に花が咲き、過去を語りあう姿・状況は、時として口角泡を飛ばし、時間の経過も忘れさせられる事もしばしばである。

先日、徳友会の会員である岡崎スミエ先生が、やはり徳島市内で開催された我々同僚の同窓会に参加され、その時の状況から岡崎先生は、「徳島で参加されていた徳島在住の方と比べ、大阪在住の徳友会の会員の方々が、ずっと活力を感じ、元気に満ち溢れている。」と話された事が、私の脳裏に強く刻み込まれている。何れにせよ徳島に在住の同窓生も、我々大阪の徳友会の会員も、皆ひとしく、後期高齢者に属している年齢である。では、何故徳友会の会員は活力があり、元気が感じられるのだろうか、それは、徳島だから、大阪だからではなく、徳島も大阪も変わるものではない。ゆあば、心の持ち方、ちょっとした考え方、或いは、自己のもつ活動力、更に、周囲より与えられる刺激等々、自己の生活環境による影響も大きく左右するのではないかと私自身は感じている。

さて、今回の会合も、研修の一環として、会則にも明記の通り、親睦も兼ね実施、とりわけ今回は、会長の岡田先生による、詩を創る心についてお話を頂き、当日、我々も一句を創り、作詩した心情を語り、岡田先生よりご指導を頂いた。平素は、脳の鍛練も疎かになっている昨今、時にはこうした刺激も、脳の活性化と思考力の涵養に必要ではないかの思いで実施したものである。

更に、この会の素晴らしさは、会員の居住地域が、兵庫県（1市・1郡）、大阪府（9市）、京都府（2市）の3府県にまたがり、

幹事に当たられた方々によって、その地域の文化をご紹介頂き、時には、その文化に触れる機会に恵まれる事は、会員の共通した楽しみの一つにもなっている。

例えば、前回は幹事が京都の榎先生であった関係で、集合はJR京都駅、会場は京都駅に隣接している伊勢丹の中国料理店で開催、素晴らしい中国料理に舌鼓みをうち、会食後は京都タワーに案内され、我々関西に住む者にとってみれば、京都タワーはまさに近い存在である。従って、何時でも行く事ができる。また、見る事ができるとの思いとは裏腹に、意外と近くのものを知ることや触れる事も少なく、灯台下暗しとの印象は否めないものがあり、京都タワーの案内は、古い歴史の価値観と、新しい京都を知る上にも大変良い企画であった。

このように、幹事の計らいで、地域の文化に触れることができるのも、我々会員の夢の一つでもあり、徳友会の特徴でもある。

今回の会合は、岡、片山が当番幹事を引き受け、大阪梅田の中心、阪急ホテル地下1階、モンスレー（フランス料理店）で開催、研修会終了後は、フランス料理を堪能して頂き、終了後は、モンスレーより土産としてフランスパンを頂き、各自帰路についた。

古郷のあることは素晴らしい、我々の古郷は徳島であり、同時に、徳島大学は我々の第二の古郷と言えるものである。この立派な古郷を子供や孫たちに伝えるためにも、我々ひとりひとりが健康に留意し、確かな思考力、活力のある行動力を平素から心掛けておかねばならないと考えるのは、私一人なんだろうか。

（昭和30年中学校課程保健体育教室卒）



徳友会 平成21年10月16日 新阪急ホテルモンスレー

私の初心俳句（研修資料）

岡田 忠

人は、思考力を働かせ心と行動で生きています。皆さんもそれぞれ自分の健康管理や生涯学習にいろいろと頑張っている生活ぶりで何時も学んでいます。

私も呆け防止の助けにと思い俳句に親しむよう努力しています。手習いの甘さで未だ俳句まで力は届きませんが、今後も取り組んでいきたく心組みしています。

今回の徳友会の研修にあたり私の初心俳句の一端を述べご教示をお願いするものです。

1、俳句の心とは、どんな状態なのか作句を通し考えて見ます。

- (1) 生活の中で感動した事を俳句に表現する心
※感動とは、美しいとか驚き新しい発見、願望とかの心の動き
- (2) 日常生活の中での出来事を見逃さずキャッチする心掛けが大切。
- (3) 四季の移り変わりの中で自然、人事の事に目を向け観察する心が大切。
- (4) 物を見る心で感性の働きが問われる。感性とは一口で表現しにくい、外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性。
- (5) 作者の真心が大切。

2、作句する上での心の持ち方の留意点

- (1) 一点に集中して作句する心。

- (2) 対象と真剣に取り組む心。
- (3) 個から全体像が読み取れる句になるよう対象を見る事（心）が大切。
- (4) 句に新鮮さと創像性を生み出す心。
- (5) 作句し続ける心が大切。

3、句の構成（五七五）とその心掛け

- (1) 二句一章（五―七五・五七―五の形）・一句一章の形・句またがり
- (2) 字余り、字足らずはできるだけ避ける。
- (3) 一句に季語は一つ、季重なる場合中心の季語の補助的な季語はよい。
- (4) 一句に動詞は一つがよい。然し二つの句もあり。
- (5) 一句に切字（例えば「や」「かな」「けり」…）は一つ。

私の愚作を俳句結社「河内野」の俳句月刊誌に毎月投句しています。また、退職者会の俳句会に月一回行っています。次の句は、私の拙句です。

春 白木蓮つぼみ上向き空突きて
夏 風鈴の音のみ聞ゆ夕庇
秋 団栗の落つ音響き芭蕉句碑
冬 風花や路地の風染め地に消えし

（昭和27年小学校課程卒）

平成22年度

渭水会幼稚園部会研修報告

森 口 照 代

恒例となっている幼稚園部会を、平成22年9月25日に鳴門教育大学附属幼稚園の遊戯室で行いました。渭水会の助成事業を受け、会場設営から講師先生との交渉等のすべてを超多忙を極めている附属幼稚園の先生方のお世話のもと、開催となりました。

そのお蔭で県下各地から久しぶりの出会いに心と

きめかせ、教育実習を受けた懐かしの学舎に集まりました。親鳥のもとに帰ってきて、ほっとするような安心感がもてる場所で学ぶことができました。これも偏に近藤慶子園長先生のお蔭と、会員一同、感謝いたしました。

幼稚園部会の会員は団塊世代の退職もあり、ここ

助成事業

数年で人数が大幅に減っています。今回、幼稚園部会を開催するにあたり、大学は地域貢献が求められているとのこともあり、幼稚園教育にかかわっている教員にも広く参加の呼びかけをしたところ、会員も含めて40人ほどの幼稚園教員が集まり、和やかに賑やかに会が進められました。

講師先生は、渭水会の会員であり、現徳島市教育委員会教育長の石井博先生にお願いをし、御講話をいただきました。「教育の目指すもの」との演題で、30数年間教育現場で仕事をしてきた中から、あるいはご自身の幼少期の思い出などから子どもへ贈る言葉として、お人柄の滲み出るような教育者としての思いを切々と語っていただきました。

教育長就任に際して、40数年前の小学校6年の担任からお祝いの葉書を頂いたことから話されまし

た。「学校の先生、教師はすごいなあ」と、心底思ったと話され、開口から「先生はすごい、すごい」と自信喪失気味の教師にやる気と誇りを与えてくれました。「塞翁が馬」のお話やジョージ・ケリング博士の割れ窓理論も印象深いお話でした。常に自己をみつめて自分を磨き、自分を伸ばし続ける人であってほしいとの言葉に、教師としての熱い情熱を燃えさせたことを再確認しあう研修会となりました。

最後に、次年度の幼稚園部会長の閉会の言葉があり、次年度の再会を楽しみに懐かしの附属幼稚園を後にしました。

昭和48年幼稚園課程卒
徳島市立千松幼稚園長



高校・特別支援学校部会総会並びに講演会

部会長 毛利久康

平成20年5月に、渭水会会則が改正され、「支部をおくことができる」が削除されました。それを受けて私どもの支部は、役員会、総会で相談した結果、昨年度より本会の名称を「高校支部」から「高校・特別支援学校部会」と改め、組織は維持することとしました。また、平成7年度より支部「一般の部」に所属されておられました顧問の皆様は、支部「一般の部」の廃止に伴い、再度本部会への参加をお願いしています。

会費は、部会の運営経費上特に必要が生じれば、協議の上徴収を決めるとし、今年度も引き続き集金をしないこととしております。

そして大学渭水会本部の「渭水会助成事業」から助成金をいただき、講演会等の費用としております。

親睦・交流については、参加者負担を原則として実施しております。

本会の会員は、昭和50年卒から昭和56年卒までの各年度の会員数が、一桁台で少ない状況です。その世代の14人の方に副会長、監事に就任いただき、会の活動をご理解いただいています。

また、今回の講演会には、大学からも講演会に5名の学生の皆さんも参加して下さいました。

そして全体で、顧問10名、現職教員30名、講師同級生4名、学生5名の49名の方が参加して下さいました。

今後とも、顧問の先輩の方から大学で学ぶ学生の皆さんまで、各世代の幅広い参加をお願いいたします。

また、今回は講演会の講師について、元小学校支部の会員の方々に大変お世話になりました。懇親会には、4名の方が出席いただき、校種を追えて親交を深める機会になりました。

助成事業

将来的には、渭水会の学校教育部会への拡がりもあるのかなと感じられた時間でした。

総会・講演会・懇親会

日時 平成22年10月2日(土)

15時より20時まで

場所 ホテルグランドパレス徳島

講演会 講師：丸山茂徳氏

東京工業大学大学院教授

「地球温暖化論に騙されるな」の著者

徳島大学教育学部地学教室 S47卒業

講演会講師の講演関連研究紹介

「日本人漢民族説と日本国家の誕生」

目的 日本人の起源と古代国家成立までの歴史を探る

手法 ①過去気候変動②鉱床③古代人骨とDNA など

結果 世界史は気候変動に支配されてきた。文明の興隆は資源、取分け鉄の鉱床が大きな役割を担った。過去3000年間で最大規模の寒冷化が2800年前におき、それが黄河下流の周帝国を滅ぼし、民族の玉突き移動が始まり、長江下流に住んでいた稲作農耕民であった呉人の北九州への移動の原因となった。以降、周期的に起きた寒冷化が漢民族の移動(4-5世紀の寒冷化は漢民族100万人が長江下流に集団移住した)を起こした。長江流域で船の輸送技術を発展させて

いた呉人が東シナ海に押し出され、長安の文明、朝鮮半島の膨大な鉄資源、日本列島の金、銀、銅、水銀(朱)鉱床、長江下流の膨大な食糧を輸送する黄海文明圏を造った。その中心に居たのが倭寇である。やがて渡来人は中国文明圏への復帰を断念し、本州東部へ政権を拡大した。

平成22年度役員

顧問 春藤 孝雄 平尾 隆信 東明 省三
林 啓介 仲尾 衛 後藤 忠雄
出葉 秀樹 住友 一郎 清兼 正志
松田 弘

(以上 総会等にご出席) 他66名 計76名

会長 毛利 久康

副会長 乾 初枝 富田 充宏 富樫 敏彦

吉田 千壽 美馬 恒子 田村 公子

井上 薫 高砂 敏文 加藤 賢治

幹事 露口 幾也 下浦 忠雄 近藤 春江

吉野 勝裕 東條 浩士 飯田ひとみ

井上 ツヤ 林 博子 山村 晃

松山 隆博 村岡 直美 山村 啓治

竹内 圭三 上野 清文 中内 貴文

事務局 城東高等学校 088-653-9111

松山 隆博 神原 弘 藤本 悦子

白草 淳

次期会長 加藤 賢治 (板野支援学校校長)

昭和49年中学校課程物理学教室卒
城東高等学校



徳島大学渭水会 高校・特別支援学校部会 平成22年10月2日 於 グランドパレス徳島

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部秘書課 (Tel : 088-656-7021 Fax : 088-656-7012)

(E-mail : hibunsyok@jim.tokushima-u.ac.jp URL : http://www.tokushima-u.ac.jp)

I 学内の状況

1 徳島大学創立60周年記念式典・祝賀会を挙げる

創立60周年記念式典・祝賀会が、平成21年11月2日「ホテルクレメント徳島」において、学内外関係者約270人が出席して盛大に挙行されました。

徳島大学合唱団のコーラスとともに開式した式典では、青野前学長の式辞に引き続き、高井文部科学大臣政務官、飯泉徳島県知事、海外交流協定校、記念事業後援会の齋藤会長より祝辞が述べられました。また、徳島大学の教育研究の発展に多大なる貢献をいただいた企業に対し、学長より感謝状の贈呈が行われました。

式典後の祝賀会では、武田元学長らの来賓スピーチの後、同窓会代表の仁木青藍会会長の発声により乾杯が行われました。和やかな会食が進む中、同大学開放実践センターの田中俊夫教授とのんき連による「阿波踊り」と「阿波踊り体操」が披露され、出席者全員で60周年を盛大に祝いました。

2 男女共同参画推進のためのフォーラムを開催

平成21年12月1日、男女共同参画推進のため「徳島大学キャリアデザインフォーラム—AWA(OUR)STYLE自分らしい働き方—」を開催し、来賓として高井美穂文部科学大臣政務官を迎え、約220名の教職員、学生が参加しました。

有賀早苗北海道大学副理事・女性研究者支援室長による基調講演では北大の多彩な取組が紹介され、続いて、徳島大学の女性研究者等支援PTから5人の女性研究者がキャリア形成と実生活の両立の問題提議とその支援方策等の提案を行いました。

締めくくりに、青野前学長がPTのメンバーの立ち会いのもと、「徳島大学男女共同参画宣言」を発表し、大学をあげての男女共同参画推進を宣言しました。

3 「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」を釜山で設立

平成21年12月19日、「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」を韓国釜山市で設立しました。

設立総会では、韓国出身の卒業生、修了生、元外国人研究者など約20人と、徳島大学からは同窓会顧問として青野前学長や理事・副学長、恩師等10数名が出席し、留学生OB等有志が準備を進めてきた同窓会の役員組織や会則等を定めました。

引き続き開催された懇談会では、留学当時の懐かしい思い出を語り合い近況を報告しました。また、

青野前学長から、同窓会と大学間の連携を強化し人的ネットワークを拡大していくための計画が紹介されました。

4 徳島大学と北里大学包括協定を締結

徳島大学と北里大学は平成22年2月15日、両大学の連携・協力に関する包括協定を締結しました。

北里大学白金キャンパス(東京都港区)において、徳島大学の青野前学長、北里大学の柴忠義学長が協定書に調印した後、本協定に基づく具体的な事業の策定及び実施について、徳島大学疾患酵素学研究中心と北里大学北里生命科学研究所が共同利用・共同研究の推進に関する覚書を締結しました。

今後は、学部間での共同研究や研究者の交流、大学院生の教育・研究における相互派遣、病院の連携などについて推進していく予定です。

II 学生関係

1 卒業式・修了式

平成22年3月24日、アスティとくしまで平成21年度卒業式・修了式が挙行され、合計1,769名(学部卒業生1,239名、大学院修士(博士前期)課程445名、大学院博士(博士後期)課程65名、助産学専攻科20名)の卒業生及び修了生に、学長から卒業証書・学位記が授与されました。

学長からの式辞、在学生総代の大概有美さんの送辞に続き、卒業生・修了生総代として、工学部の三好星也さんより「日々努力することを惜みず、また徳島大学で学んだこと活かすことで、自分自身の将来への道を切り拓いていきます。」と答辞がありました。

2 入学式

平成22年4月6日、アスティとくしまで平成22年度入学式が挙行され、香川学長が合計2,039名(学部1年次1,330名、学部3年次54名、大学院修士(博士前期)課程516名、大学院博士(博士後期)課程119名、助産学専攻科20名)の入学を許可しました。

入学生を代表し、歯学部歯学科の菊岡星花さんの総代宣誓の後、学長から「『人間力を養い、自分の個性を生かしたキャリアデザインを考えること』、『探求心に基づいた教養的知識と専門的知識の獲得のバランス』、『21世紀に身につけるべきコンピテンシー』の3つの能力が社会で要求されているので、今後の大学生活を有意義に過ごし、大きく成長してください。」との式辞がありました。

総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は徳島大学総合科学部総務係へお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 TEL：088-656-7103 FAX：088-656-7298
E-mail：sksoumks@jim.tokushima-u.ac.jp

■総合科学部 1号館を改修

総合科学部 1号館は、南棟・中棟について耐震改修を終え、平成22年3月に竣工しました。教員研究室のほか院生・学生研究室や実験室が整えられ、改修前よりも学生のためのスペースが増えたことにより学生の自学・自習を後押ししています。またオープンスペースや中庭が整備され、教員・学生が専門の垣根を越えて和やかに語り合えるコーナーができ、より活発な総合科学の推進が期待されます。さ

らに、1階の正面玄関近くには地域交流プラザが設けられました。地域住民との学びの交流を行い、地域社会の「知の拠点」となることを目指して、今後、研究成果の発表や講演会・セミナーなどを開催する予定です。

今年度は8月から残る北棟の改修工事に着手し、竣工は平成23年3月を予定しています。北棟改修後には、学部図書室が設置されることで、様々な分野の資料がすぐに手に取れる環境を整えて、より活発に教育・研究を展開したいと考えています。



編集後記

渭水会会報第39号をお届けします。ご寄稿された皆様には厚く御礼申し上げます。今年度は渭水会役員の改選の年であり、12年間の永きにわたり会長であられた井内孝幸先生が退任され、新しく佐藤 勉先生が会長に就任し、その挨拶をご寄稿いただきました。また副会長の栢田 務先生、露口玲子先生も退任され、吉森章夫先生は留任され、新たに毛利久康先生と近藤隆子事務局長が副会長に選出されました。今後はこの新しい体制で渭水会が運営されることになりました。総合科学部と大学院が昨年度に改組され、母校は新しい教育研究体制で運営されています。また総合科学部1号館の南棟と中棟の耐震大改修工事が今年の3月に終わり、現在は北棟が改修工事中です。渭水会、総合科学部・大学院の体制、そして建物が一新され、母校は新たな出発の時を迎

えています。今回の第39号では中川秀幸副学部長に「総合科学部では今(21)」として「国立韓国海洋大学校との船上シンポジウム」をご寄稿いただきました。また特集として組まれた平木美鶴教授の「徳島LEDアートフェスティバルの参加について」には新技術を駆使した芸術が記されています。この中のWebサイトを読むと芸術作品の制作には大変な作業が伴うことが分かります。一方、石川学部長の似顔絵付きの新たな連載コラム「感動が人間を育てる」が始まりました。おもしろくて格調高い連載コラムをご期待下さい。さらに新しくLet's Sportsの連載が始まり、鹿屋体育大学学長の福永哲夫先生にご寄稿いただきました。この第39号には学芸学部を卒業された会員の皆様から多くのご寄稿いただきました。広報係では会員の皆様からの色々な内容のご寄稿をお待ちしています。